

# Advance.

# 7年生、West棟へ

## ～「戻ってきた場所」で始まる新しい学び～

2026年が始まり、7年生はいよいよWest棟での学習をスタートしました。新しい教室へ「引っ越してきた」というより、昨年度まで使っていた懐かしい校舎に「帰ってきた」という表現がぴったりな、そんな落ち着いた空気を感じています。

授業中の様子はもちろん、日常の何気ない場面にも、7年生の更なる成長がはっきりと現れています。特に印象的だったのは、引越し作業の最中の姿です。「East棟はロッカーがなかったから気づかなかつたけど、中学生になったから教科書やノート、ファイルの量が増えて、ロッカーに入りきらないよね。だったら、教室の他の棚が余ってるから、そこにみんなの教科書をまとめて整理して並べて、各自のロッカーには余裕を持たせようよ！」「座席の配置も、これまでと同じじゃなくていいよね。どうする？2人ペアがいいか、3人グループか、4人グループか。どう回すと学習しやすいかな？」誰かに指示されるのを待つのではなく、学級の雰囲気が・学習環境がよりよくなるように、自分たちで考え、話し合い、折り合いをつけ、「合意形成」していく、そんな建設的な話し合いが、あたり前のように行われていました。

1月5日には、生徒一人ひとりから「2026年の抱負」を語ってもらいました。そこでも印象的だったのは、正解を探すような言葉ではなく、遊び心と創造力にあふれた、自分らしい宣言を堂々と語る姿でした。「挑戦したい」「面白そう！」という言葉が自然に飛び交い、7年生の学びが、しっかり未来へと向かって動き出していることを強く感じました。

West棟へ一緒に移動してきた6年生の担任・山下先生からは、こんな言葉もかけていただきました。

「7年生は、いつも大崎先生がほとんど指示を出さなくても、子どもたち自身が考えて、話し合って、動いていますよね。6年生も、1年後にはこんな素敵なお姿になれるよう育てていきたいですね。」

この言葉を聞き、7年生のみんながこれまで積み重ねてきた時間と経験、そして、「学びに向かう姿勢」を心から誇らしく感じました。



英語の「school」という単語は、ギリシャ語で「楽しみ」を意味する言葉から生まれた。

それなのに現代の学校は、遊びから楽しみを奪ってしまった。

教育と創造性に関する研究で名高いケン・ロビンソンは、学校が創造性を殺すと主張している。

「私たちは教育のファストフード化を容認してきました。その結果、まるでファストフードが体をむしばむように、教育が精神を弱らせることになってしましました。…あらゆる偉業は、創造力から生まれます。ところが現代の教育システムは、まさにその創造力を奪いつづけているのです」

遊びはくだらない、という考え方方は、大人になるとさらに強く刷り込まれる。あまりにも多くの会社が、遊びを殺してしまっている。

「わが社は遊びと創造性を重視しています」とアピールする会社もあるが、たいていは口だけだ。本当に遊び心に満ちた職場を実現できている会社は、めったにない。

(中略)

精神科医でナショナル・インスティテュート・フォー・プレイの創設者である、スチュアート・ブラウンは、6000人を対象に遊びと成長の調査をおこない、遊びが人間のさまざまな面に良い影響を及ぼすという結論を得た。

遊びと体が健康になり人間関係が改善され、頭が良くなりイノベーションが起こしやすくなる。

「遊びは脳の柔軟性と順応性を高め、創造的にしてくれます」と彼は言う。

「遊びほど脳を奮い立たせる行動はほかにありません」

参考：「エッセンシャル思考」 グレッグ・マキューン：著  
高橋璃子：訳（かんき出版）

7年生が語った2026年の抱負や、日々の教室での姿は、まさにこの言葉を体現しているように思います。

遊び心を失わず、想像力・創造力を働かせながら、自分たちの学びを自分たちでつくっていく。

その姿勢こそが、これから時代を生きる力なのだと思います。

7年生は今、SOLAN全体を内側から引っ張る存在になっています。自分たちの学級、自分たちの学びを、自分たちの手でつくろうとする姿は、下の学年にとっても、大人にとっても、大きな希望です。

2026年も、7年生のみんなとともに、「遊び心」を大切にしながら、学び、考え、成長していきたいと思います。

保護者の皆さんと手を取り合いながら、子どもたち一人ひとりの成長を、これからも丁寧に支えてまいります。本年もどうぞよろしくお願ひいたします。

[【試験運用】聴くClassNewsletterはこちら](#)

## We will value “Purpose” and “Ownership” for you